

1 マレーニ協同組合の特徴と歴史

事務局から依頼された原稿は、マレーニとクリスタル・ウオーターズの協同組合コミュニティの概要ということである。この概要部分はいままで私が執筆した数本の原稿を整理する形でまとめている^{注1)}。また今回の2012年11月の調査では、2010年春の調査に比べてマレーニでもクリスタル・ウオーターズでも新たな動きがあったので、これを文中で付け加えた。

レイドロー報告とマレーニ協同組合コミュニティ

A.F.レイドローが国際協同組合同盟第27回大会（1980年）のために準備した報告書『西暦2000年における協同組合』の中で、レイドローは協同組合運動の展望を示すとともに、いかにして協同組合地域社会を建設するかについて述べた。レイドローは、地域社会を改革するためには、1種類ではなく多目的の協同組合またはいく種類もの協同組合が協力することであり、また全国やマクロからではなく地域でミクロ的にスタートすることが重要だと述べている^{注2)}。マレーニ（Maleny）の協同組合コミュニティは、レイドローが述べた小さな村から協同組合社会を建設し、多くの協同組合が協力し合いオーストラリア協同組合の首都とまで言われるようになった地域再生の具体例である。地理的位置は、クイーンズランド州ブリスベンの北100キロ、海から30キロ、標高800メートルにある。

協同組合コミュニティとしての特徴

オーストラリアの酪農が国際競争力に負け1970年代に過疎の村が増えていた。マレーニもその内の1つであった。このマレーニが、今では芸術家が集まり信頼で築かれた協同組合の町へと変化している。町の人口は2,000人ほどで周辺人口を加えても1万人前後であるが、20~30の協同組合やアソシエーションその他の組織が、協同組合コミュニティとしてくもの巣のようなネットワークを形成している。行政の支援なしで女性が中心となってコミュニティを形成してきたのが特徴でもある。マレーニの町から車で30分の所にクリスタル・ウオーターズという村がある。パーマカルチャーという共生思想に基づいて世界最初の協同組合エコヴィレッジが設立され、国連から1996年に表彰された。世界各国から人々が集まり小さな地球村を形成している。クリスタル・ウオーターズとマレーニは一体と考えてよい。どちらも経済面だけでなく、環境面や、民主主義・参加・公正などの社会面を重視し、弱者に優しい地域社会である。1979年に最初の協同組合である生協・メープル・ストリート・コープが設立されてから30年以上が経過し、マレーニには30歳台の第二世代が育っており新たな段階に入っている。彼らはマレーニに誇りを持っている。今回の訪問でも彼らのうちの1人が、マレーニの人口当たり協同組合の密度はスペイン・モンドラゴン協同組合に次いで世界2位だと説明していたことでもわかる。

協同組合コミュニティ生成の歴史

協同組合コミュニティが形成された歴史を見ていこう。1979年にメイプル・ストリート・コープ（生協）が設立されて以降、2003年までの間に28の協同組合やアソシエーションなどの組織が設立された。2つ目の協同組合が設立されるまでに5年がかかっているが、その後は次第に間隔が短くなり、1991年からは1年ごとに複数の協同組合その他の組織が設立され加速している。ニーズを重視して地域に必要な協同組合が次々と設立され、環境、健康、教育、工芸・美術・音楽・映画など文化領域のサービスや活動が拡大し雇用が生まれていった。2003年以降は成熟したコミュニティとなりほとんど新たな組織は設立されていない。以下はその設立された組織名、設立年、組織の種類である^{注3}）。

メイプル・ストリート・コープ(1979年;生協)、マレーニ・クレジット・ユニオン(1984年;銀行)、クリスタル・ウォーターズ・コープ(1986年;エコヴィレッジ)、レッツ・システム(1987年;地域通貨)、ウエイストバスターズ・コープ(1989年;リサイクル)、マウンテンフェアー・コープ(1989年;女性の起業支援)、 balan・ランドケア・アソシエーション(1991年;環境)、MENA(The Maleny Enterprise Network Association) 有限会社(1991年;起業支援)、セダートン・フォレストーズ・コープ(1991年;エコヴィレッジ)、マンドゥカ・コープ(1991年;エコヴィレッジ)、アーナンダ・マルガ・リバー・スクール(1992年;教育)、ブラック・ポッシュム・コープ(1992年;出版)、ピース・オブ・グリーン(1992年;アート・クラフト)、マレーニ・フィルム・ソサエティ・有限会社(1993年;映画上映)、ワルー・アーツ・コープ(1994年;パフォーマンス)、マレーニ・コープ・クラブ(1994年;レストラン・社交クラブ)、グリーン・ヒルズ有限会社(1995年;環境)、ブルビン・バレー・ラーニング・センター(1995年;教育協同組合)、LEED(Local Economic and Enterprise Development)コープ(1997年;起業支援)、ネイバーフッド・センター(1997年;社会サービス)、FACE(Family and Community Empowerment)(1998年;家族支援サービス)、YOGI(Young Organic Growers Group)(1999年;青年グループ)、ヒンターランド・ラジオ(2000年;コミュニティ・ラジオ放送)、マレーニ・コミュニティ・フォーラム(2001年;諸問題検討フォーラム)、ブルビン・ブッシュ・マジック(2001年;労働者協同組合)、MENA コミュニティ・ポータル・購買グループ(2001年;地域ネットワークと購買)、マレーニ・カルチュラル・ラーニング・エクステンジ(2002年;文化交流グループ)、マレーニ・ワーキング・トゥギャザー(2003年;戦略計画プロジェクト)

協同組合を中心とした組織を立ち上げていく過程で、地域づくりの原則やゴールデン・ルールとジル・ジョーダンが名付けた方法論が見つげ出された^{注4}）。地域づくりの原則は次の10項目である。

- ① 織の立ち上げは地域のニーズを満たすものでなければならない。
- ② 設立者グループを明確に確立すること。
- ③ 関係者はビジョンへしっかりコミットすること。
- ④ 可能性調査を実施すること。
- ⑤ 明確な目標を設定すること。

- ⑥ 事業計画は健全であること。
- ⑦ 参加メンバーを絶えず支援すること。
- ⑧ 活動拠点を確保すること。
- ⑨ 優れた人材を確保すること。
- ⑩ 教育・訓練を継続すること。

またゴールデン・ルールは次の 6 項目である。

- ① 取組みは小さく始める。
- ② 同じような経験をした人たちの具体例から学ぶ。
- ③ プロジェクトへの参加には、その人が得意なこと、喜んでくれることをお願いする。
- ④ 自分には価値があり「みんなの役に立っている」と感じることをお互いに確認しあう。
- ⑤ どのように協力して働くかを教える（競争ではない）。
- ⑥ 最低 2 人以上がプロジェクトについて完全に理解していること。

2 コアとなっている協同組合その他

マレーニの協同組合コミュニティでコアになっている協同組合その他の組織について説明しよう。メイプルストリート・コープは 1979 年にジル・ジョーダン達によって設立された生協である。店舗は住宅・雇用情報、交流などの情報センターとなり、同じ価値を持つ人たちのネットワークが形成されていった。無農薬の野菜やハーブの栽培から始めたが、今ではすべてオーガニック商品である。日本の商品も多くある。小さな町で競争相手が何軒もあるので売上高は年間でも 1 億円程度の小規模である。メイプルストリート・コープの裏庭には最近コミュニティ・ガーデンが作られ、市民農園が始まっている。いずれ子ども対象のパーマカルチャー教育もここで始めるという。

店の隣に 1994 年に設立されたアップフロント・クラブ (UpFront Club) は、昼は喫茶店、夜はレストラン・音楽家の演奏会場になる町一番の社交場で協同組合のように運営されている。設立初期には赤字が拡大し、倒産寸前になったがジル・ジョーダン達が経営を立て直した。以前のこのクラブではボランティアが沢山いたが、今は経験のある人、モチベーションの高い人が中心になっている。また専任のシェフが雇われ料理は専門化した。コープのミーティング、講演会、コンサート会場、絵画の展示など多目的な活動の場になっている。

マレーニ・クレジット・ユニオン (MCU) はマレーニの各種協同組合のメインバンクである。メイプルストリート・コープ設立の 5 年後に協同組合として設立されたが、今ではメンバーは 43,000 人、預金高 5,000 万ドルと大きくなり法的には会社組織に転換した。しかし組合員の話し合いによって協同組合の性格は残している。クレジットユニオンでは、企業報告書は環境、社会、経済の 3 分野を重視する形で作成される。社会面では例えば利益の 10% を地域の学校や各種団体に寄付する。また弱者を助ける緊急時基金がある。環境、社会、経済の 3 分野を重視するのは他の協同組合でも同様である。

クレジットユニオンでも救えない貧しい人のためにジル達が考え出したのが地域通貨マレーニ・レッツ (Maleny LETS) である。1987 年に取り入れたものであるが、マレーニで成功し、レッツはオーストラリア全土 200 カ所ほどに広がった。通貨単位はバニヤで 1

バニャ＝1 オーストラリアドルである。加入には現金で 10 ドル支払う。導入以来 25 年以上経過しているが、今でも若い人から高齢者まで 200 人位が月に 5,000 バニャ（45 万円）位を動かしている。最近ではコンピュータでオンライン化したので便利になった。バニャがなくてもサービスを購入することで雇用が生み出される点を重視している。これで貧しい人も使える形になる。バニャは、メイプルストリート・コープでのアルバイトの賃金支払いや次の環境組織が育てる苗の購入代金、その他多くのサービスで使われている。

balan・ランドケア・アソシエーション（Barung Landcare Association）は環境 NPO といったところだろう。しかし協同組合のように運営しており、土地管理、水質管理、土壌管理、森林・生態系保全などにかかわる。絶滅危惧種の保護活動もやっている。マレーニには 4 つの環境組織がありその内の 1 つであるがそれぞれは密接につながっている。メンバーは 700 人で 180 人のボランティアが含まれており、全国で最大の balan・ランドケア・アソシエーションである。

クリスタル・ウォーターズ・コープ（Crystal Waters Coop）は、パーマカルチャー思想に基づく協同組合エコヴィレッジである。マックス・リンデッガー（Max Lindegger）達によってパーマカルチャー思想に基づくエコヴィレッジとしてデザインされ、マレーニ・クレジット・ユニオンも協力して協同組合として 1986 年に設立された。パーマカルチャーとは日本の共生思想にあたり、パーマネント・アグリカルチャーまたはパーマネント・カルチャーの合成語で、持続的農業・文化の思想である。

この思想に基づくクリスタル・ウォーターズの生活は、森・池・農地・放牧地・住宅などの環境デザイン、太陽熱・雨水の利用、ミミズによる排泄物・ゴミの肥料への転換など自然との共生型生活を重視しており、電線は地中に埋められ電気代は普通の 1/4 位、ゴミも 1/4 位である。もともとはげ山に近かった 500 ヘクタールの土地には何万本もの木が植林され、現在では緑豊かな森に変わり多くの鳥が鳴いている。

クリスタル・ウォーターズに入居する人は、マレーニの協同組合とは違い、協同組合が好きで組合員になるというよりも、都会を離れたい、環境がいい、自然や野生動物が好き、両親がここにいる、などの理由で移り住んでくる。そのために、参加・民主主義の原則を持つ協同組合をよく理解していない人も多い。また、住んでいる誰かが出て行き、別の誰かがその土地を買う場合でも、住んでいる他の組合員の許可は全くいらぬ。従って協同組合を全く理解しない人も入ってくることになる。しかし失敗であるとは必ずしもいえない。オーストラリアでは 2~3 年につぶれるエコヴィレッジが多いが、30 年も続いているのはエコヴィレッジとしては成功していると言えるだろう。

オーストラリアの協同組合法には利益追求型と NPO 型の 2 種類がある。クリスタル・ウォーターズ協同組合は利益追求型で設立された。この方式では、全員が合意すれば資産を売却して分配し解散することも可能である。事実そういうことを考えている人もいた。しかし 2010 年に役員の中の若い有能な人が、やり方を変えてもう一度協同組合を再建しようと考えた。それは NPO 型に転換することである。NPO 型では助成金が得られることも理由であるが、NPO 型にすれば自分達で運営できるタイプに変えることが可能になるかもしれないと考えた。反対する人もいたが総会では 75% 以上の人賛成して協同組合は NPO 型に転換された。2012 年 11 月の時点では法的には NPO 型に転換されたが税法上で

はまだ認可されておらず電気代の値下げなど NPO 型の利点は完全に享受できていない。
注

1) 津田直則[2012]『社会変革の協同組合と連帯システム』(第 5 章) 晃洋書房、同上[2009]「オーストラリア・マレーニ協同組合コミュニティと地域再生」『にじ』No.627、同上[2008]「社会変革の協同組合ー協同組合の町マレーニー」『協同の発見』197号を参照

2) 日本協同組合学会訳編[1989]『西暦 2000 年における協同組合』参照

3) Jill Jordan[2003]”Co-operation Maleny”(Cooperative Australia のサイトで手に入る)参照

4) Jill Jordan [2001] *Community & Economic Development: Towns Shaping Their Destiny*, ACCORD Paper No.4, University of Technology, Sidney, p.11 参照